



2代社長の森山友信 初代専務の加藤作逸 初代社長の森山吉正

管・水道工事で基盤を築き 簡易水道事業で業績伸ばす

資本金は10万円で、17人の発起人の中から、後に初代出雲市長となる山田金右衛門が社長に就き、今市町、大津町へ水道供給に努めた。太平洋戦争が始まる直前の昭和15年には今市水道(株)に社名を変更

した。

戦後復興期の23年は水源地拡張、配水管増強で給水区域を拡大。水道事業がほぼ終了した33年に、出雲市に水道事業を譲渡した。

譲渡後は、資本金2千万円で出雲瓦斯(株)に社名変更してガス事業に携わり、34年6月末に都市ガス配管の全工程を竣工した。7月7日から供給され、工事終了に伴って、かつての水道工事従事者を雇用するため分社化し、同16日に水道、暖房、衛生、その他配管工事の請負を専門で行う新会社として今市水道(株)が旧社名を引き継ぎ誕生した。

皇太子(今上天皇)と美智子さまが結婚された記念すべき年の船出だった。資本金は55万円で、初代社長の森山吉正、専務の加藤作逸らが出資した。今市町に事務所を借り、自転車、バイク、荷車各1台でのスタートで、7人の従業員は、スコップとツルハシで

土を掘って荷車で運ぶ人力が頼りの工事に汗を流した。

本管など大型工事を受注

当初は、出雲市での受注が少なく、業界の先輩であった山陰クボタ水道用材(株)の下請け施工で創業期をしのいだ。間もなく、近くに本社を借地移転し、資本金を100万円に増やした。35年は、150万円に増資し、従業員が21人に増えて手狭になったこともあり、出雲市姫原町に150坪(約495平方メートル)の敷地と建物を購入して移転した。事業は徐々に増加。35年は、斐川・宍道広域の簡易水道事業を初受注し、松江市古志原では水道管理設替工事で最初の本管工事を請け負った。各町村が簡易水道を計画するようになると、37年には加茂町(現雲南市)から、配水池から本管、給水までの一連の大型工事を受注した。同町を襲つ



出雲市姫原町にあった旧本社

た39年の大水害では徹夜の復旧作業を3日間行った。このころからは、水道管敷設工事で培われた技術を駆使して冷暖房などの配管工事も手がけるようになった。

創業7年で年商1億円突破

41年の決算で年商が1億500万円と創業7年で初めて1億円の台を突破した。施工管理技術の向上、技能・技術者の養成などを充実させ技術面でも大きく進展。1級の管工事施工管理技士や建築設備士などの資格者が増加して独自に施工管理を行えるようになった。

業績向上に伴い、43年には資本金を500万円に増やし、姫原町に鉄筋2階建ての新社屋を建設した。従業員同



旧本社での作業風景

士のコミュニケーションがとりやすい環境作りや福利厚生面についても充実を図った。48年のオイルショックでは、何とか資材を調達して工事は中断させなかったものの、発注者が倒産して不渡りを出し、代金を回収できないという苦い経験も味わった。

創立20周年を迎えた54年は、社長が初代の森山吉正から、53年に入社した弟の森山友信に交代した。同時に創業者で後に出雲市名誉市民となる森山金一が会長に就任した。なお、友信は57年から12年間、島根県管工事業協会会長を務め、出雲工業高校の環境システム科設立に携わり、次世代の育成、技術力の向上など島根県の管工事業界の発展に尽力した。

— 次号に続く —
(榎原正之)

イマックス

◆1◆ 「基礎固め」

給排水衛生設備・空調調和設備・水道施設・消防施設工事などを手掛ける出雲市高岡町のイマックス(株)。ルーツは大正11年創業の今市簡易水道(株)にさかのぼり、主に中心市街地の今市、大津両町の水道普及に努めた。ガス事業にも関わり、昭和34年に管・水道施設工事の今市水道(株)として再スタートしてからは、各市町村の簡易水道の新設・拡張工事で業績を伸ばし、平成に入ると宅内水道工事でも手掛けてきた。市場が縮小するなか、創立50周年を機に現社名に変更し、グループ6社が連携を強めながら空調、福祉、リフォームといった多業種を展開することで、快適な暮らしの提案、街づくりに努めている。

わが国は、文明の発展に伴い、明治中期から大正時代に

かけ、病気のない生活を求める機運が高まり、人々は安全

でおいしい水道水を求めるようになった。これに呼応し、

全国各地で上水道の敷設計画が相次いで策定された。



本社前に立つ社長の加藤幹夫＝出雲市高岡町



今市水道の社章

上水道工事がスタート

イマックスのルーツも、出雲部の中心地だった今市町での上水道工事にさかのぼる。大正7年、今市町に上水が通水すると、普及を望む住民の声が強まり、11年に今市簡易水道(株)として、需要に応える形で設立された。



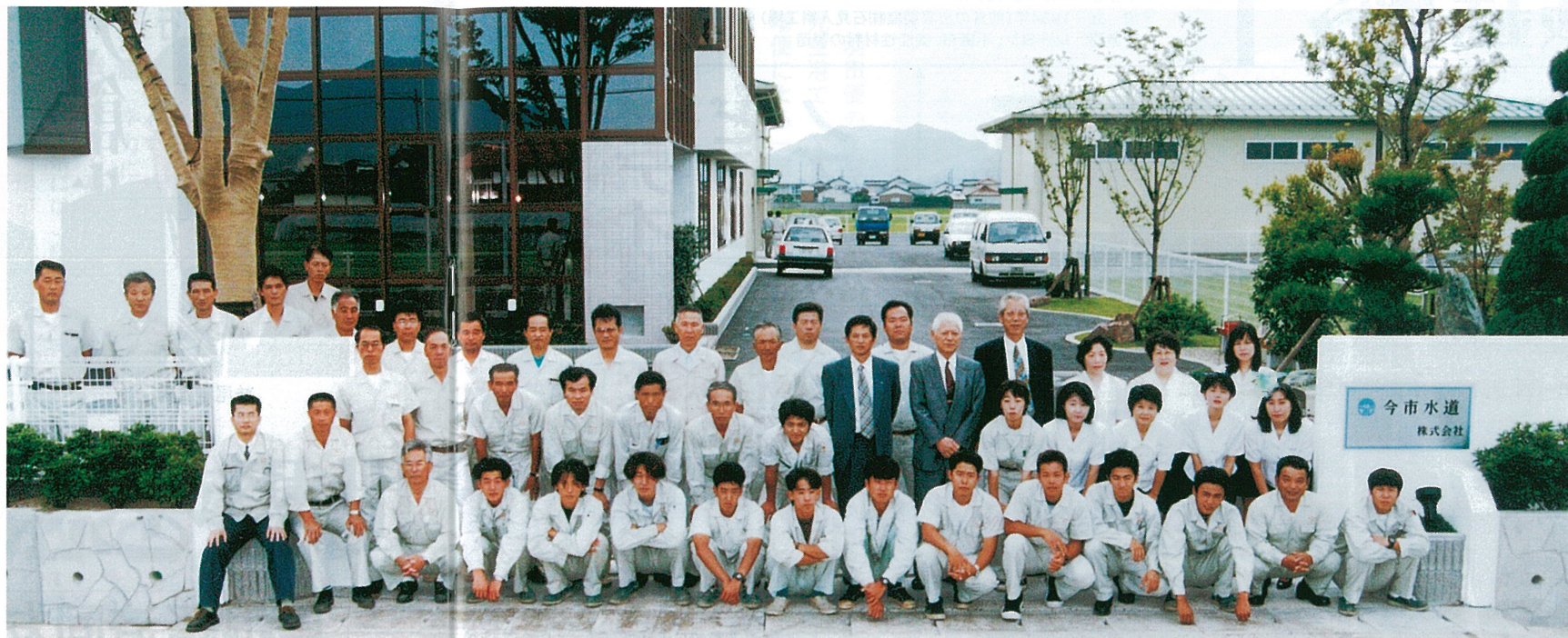
設立当初の現場作業

イマックス(株) / 出雲市

DATA

創業・設立	1959(昭和34)年7月
営業種目	管・水道施設・消防施設工事、空調・給排水などの保守点検
資本金	4千万円
代表者	加藤 幹夫
役員	田邊弘文、日野朋康、飯塚俊道、吾郷祐司、森山恵介、川村吉央、山陰康博、小松博幸
従業員数	約70人(グループ約160人)
売上高	約15億円(同約26億5千万円)
所在地	出雲市高岡町166-1
電話番号	0853(21)0009
グループ	山陰温調工業、イマスイ、雲南福祉サービス、フォーシंक出雲、トマック

【会社概要】
 ▽所在地 出雲市高岡町166-1
 ▽営業種目 管・水道・消防施設工事、空調・給排水等の保守点検
 ▽代表者 加藤 幹夫
 ▽従業員数 約70人
 ▽電話番号 0853(21)0009



完成した新社屋前での記念撮影＝出雲市高岡町

景気に左右されやすい業界だけに、昭和50年代は57年の「くにびき国体」に向けて右肩上がりでの業績が伸びたが、その後は工事件数の激減などで60年代は非常に苦しい冬の時代を経験した。それでも平成になると内需が旺盛で好況を維持し、年商も7年決算で20億円を突破するなど、安定的に社業を伸展させていった。

大型公共事業で年商12億

大型公共事業が相次いだ昭和50年代。創立20周年の54年に2代社長に就いた森山友信は「みんなと一緒に頑張ろう」と従業員一人一人の顔を思いながら業務を推進した。旧島根県立中央病院、島根医科大学（現島根医科大学）、出雲空港などの大型公共事業で給排水衛生空調設備などを受注し、56年の決算では年商が約12億円と初めて10億円を突破した。

しかし、くにびき国体以降



創立20周年式典で喜びを表す従業員たち

は事業が激減し、厳しい経営を余儀なくされた。公共工事が増える見込みもなく、同業者の間にも将来に対する不安感が募ってくるような状況だった。61年には常務の藤江義勝がベテラン技術者10人を引き連れて土木工事を専門とする新会社の山洋工業(株)を新設。当初は資本金1千万円のうち600万円を今市水道が出資した。



旧社屋での作業風景

62年決算は、年商が過去最高だった57年の14億円の約半分となる6億4500万円に減少し、27期ぶりの損失を出した。このため、役員が率先して厳しい状況を乗り切る決意を示し、報酬のカットに踏み切った。今市水道を取り巻く環境の厳しさは予想以上のものだった。

経営努力によって、改善の兆しが見えるようになったが、従業員の士気を高め、一致団結して社業を推進しようと、63年は健康茶として注目

苦境時に杜仲茶を売り団結 積極的に宅内排水工事受注

されていた杜仲茶の販売を行った。1人100箱の割り当てをして取り組んだ結果、杜仲茶の販売利益を含め当該年の営業利益約1千万円を上げることができた。

森山は「新会社の山洋工業に移った人たちのためにも今市水道を守っていかねければならないと誓った。杜仲茶販売は、今市水道で働いていれば安心だという気の緩みが従業員に出てくるように感じられ、意識改革のきっかけにしたいという気持ちで実施した」と述懐している。

排水工事でステップアップ

冬の時代を経て、平成元年からは宍道湖西部流域下水道が供用開始になり、出雲市周辺市町では農業集落排水施設、漁業集落排水施設の整備も行われ、上水道工事や大型公共施設工事だけでなく住宅などの排水設備工事の受注も見込まれ、管工事業界に新しい光が見えてきた。

いざ、宅内排水設備工事が始まると、古い市街地だったことから民家での配管は畳をはがすなど汚れがひどい床下



新社屋の竣工式

作業が中心だった。しかし、昭和60年代の苦しさを経験しているだけに、積極的に工事を受注し売り上げを伸ばしていった。この経験が後の住宅設備工事の基礎となった。

この間、平成元年には30周年を迎え、記念式典を開いて祝い、翌2年には2000万円に増資して、次代を担う従業員に社の発展を託すため、株を分割した。

この2年は、創業時の専務だった加藤作逸の長男で現社長の加藤幹夫が、山陰クボタ水道用材から、取締役営業部

長として入社した。間もなく、バブル崩壊、55年体制の崩壊など経済の低迷期に入ったが、加藤を中心に積極的な営業活動を展開。水道施設工事の広域での受注を強化し、大型機械設備工事へも進出した。また民間設備工事の受注にも力を注いでいった。

現在の島根県立中央病院の給排水衛生設備、平成5年から事業着手した宍道湖を横断する斐伊川水道建設事業の送水管敷設工事などを受注した7年は、完工した施設も多く、決算では売上高が20億円の大台を初めて突破した。

組織体制強化し本社移転

8年以降には、掛合、加茂、多伎町をはじめとした簡易水道拡張工事、大型設備物件では防衛施設局出雲駐屯地、島根医科大学、島根県立大学エネルギーセンター、公立邑智病院増築などを完工し10年連続で売上高20億円超えを維持した。

このころ、大手ハウスメーカーからの受注が増え、住宅設備部門と引き渡しの施設を維持管理するメンテナンス部門を新設するなど組織体制



現在のCAD作業

の強化を行った。業務の拡大に伴い、作業の効率化を図るため7年にCADを導入して業務をコンピューター化するなど近代化を推進した。

また、姫原町の本社は、駐車場、資材置き場が狭く、社屋も手狭になったことから、8年には現在地に3階建て960平方メートルの新社屋と倉庫2棟計464平方メートルを新築した。

11年には創立40周年を迎え、記念式典の開催や周年誌「水と生きる」の発刊で50周年に向け、新たな気持ちでスタートを切った。

（敬称略）
 —次号に続く—
 （神原正之）

【会社概要】
 △所在地 出雲市高岡町166-1
 △営業種目 管・水道・消防施設工事、空調・給排水等の保守点検
 △代表者 加藤 幹夫
 △従業員数 約70人
 △電話番号 0853(21)0009



社内のコミュニケーションを図る社長の加藤幹夫＝出雲市高岡町のイマックス

平成11年に創立40周年の節目を迎えると、コア事業の管工事、水道施設工事などで業績を伸ばして基盤をさらに強固にする一方、別会社を設立してグループ化を図り、異業種や関連業種にも参入。21世紀に生きる企業として、水道工事業のイメージの強かった社名を「今市水道」から「イマックス」に替え、多業種展開している。

グループホームを開設

40周年の区切りを経て12年はトップが交代し、2代社長の森山友信が辞任して8年に入社していた従兄弟の松浦良治が就任した。松浦は、山陰



3代社長の松浦良治



雲南福祉サービスの「加茂の杜」

合同銀行広瀬、津田の支店長を経験するなど、経理面での期待が大きかった。16年には、松浦の地元・加茂町（現雲南市）で、グループホーム、デイサービスなどの「雲南福祉サービス」を設立。同町初のグループホームとなる「加茂の郷」を17年に開所した。平成23年4月には、グループホーム「加茂の杜」も開設した。

で、その人らしい、より良い暮らしの実現を目指している。18年には、松浦が退任し、4代社長に専務の加藤幹夫が就任した。また、2代社長の森山友信が会長として復帰し、26年に退任するまで陰に日向に社業を見守った。



フォーシंक出雲

別会社を設立し多業種展開 社名変更で地域に軸足移す

任当時を振り返る。
 21年は創立50周年を迎え、さらなる飛躍を誓い、社名を「imacsイマックス」に変更した。今市水道の「ima」と、「Customer Service」の「a」を合わせた「imacs」の頭文字を合わせた社名で、公共事業から地域に軸足を移すイメージを描いた。感動、感銘などを提供する顧客の満足度を高め、地域に役立つ会社を目指す。



イマックスのロゴマーク

乳化装置を製作し 特許登録

23年は、企業内に産業用ポンプ、乳化（エマルジョン）装置開発を手掛ける「トマック」を設立した。
 島根産業振興財団が試作開発に取り組み県内企業を支援する制度の発展型試作開発等助成金に選出された乳化装置を製作している。特許登録しており、小型で高圧性能が発揮できるマ水とエアと一緒に送れるマ高粘度の液体を送ることができるとの特長を持つ。

25年にはポンプを応用した乳化装置の「ユメトマック」を開発した。粉碎された具材と水が強くかき回されるために分離せず、乳化剤もいらぬ。エゴマ搾油残渣などに実用化され、有機栽培ミカンやユズの皮ごとペース



乳化装置の「ユメトマック」

トなど、未利用資源の2次加工の促進を行う。

住まいの相談受ける 会社設立

同じく23年には、地域の人たちから住まいの悩みに関してリフォーム、ファイナンス、デザイン、不動産の四つの分野からの相談をワンストップで受けられるよう「フォーシंक出雲」をイマックス近くに設立した。

開設時には、山陰両県初の太陽光発電で電力を戸別供給するデザイナーズ賃貸マンション



イマスイの社内

グループ企業はこのほかに本社隣接地に「イマスイ」、松江市に「山陰温調工業」がある。

イマスイは、給排水衛生設備工事、修理など各メンテナンス工事、冷暖房換気工事、消火設備工事などを行っており、



山陰温調工業

り、イマックスの実働部隊として開設。Aランク指定を目指している。

空調工事を主とする山陰温調工業は、初のM&A（合併・買収）で18年にグループ化した。イマックスと同じ昭和34年の設立で、取引の中で培われた顧客との絆は強い。イマックスと競合する面もあるが、お互いが切磋琢磨することとで共存共栄を目指す。

この間、25年には石見養護学校特別教室棟の給排水衛生設備工事で優良工事業者としてイマックス初の県知事表彰を受けた。

（敬称略）
 次号に続く
 （榎原正之）



多くの家族連れなどでにぎわう春の感謝祭＝出雲市知井宮町、朱鷺会館



高いモチベーションで業務に励む従業員



毎年行われるグループ技能大会



環境美化を推進する海岸清掃

快適な暮らしの提案に向け 全社一丸となって民需開拓

国大会への出場を奨励し、大会の2カ月前からは練習期間を設けている。今までに配管部門で銅賞(3位)2人、敢闘賞2人の入賞実績がある。また、年間を通して社業に貢献した優良社員には、年賀式で表彰している。従業員の一体化を図るため、毎年春と秋の2回、社長を含む役員との面談会を実施。希望の配属先、目標などを共有し、意見交換を通して意思疎通を図り、社員に高いモチベーションで働いてもらうため、風通しの良い社風創りを心がけている。

代に責任のあるポストに就かせたい。私自身が43歳で取締役営業部長に抜擢していただいた恩返しでもあり、思う存分に能力を発揮してほしい」と期待している。

子育てサポート企業に認定

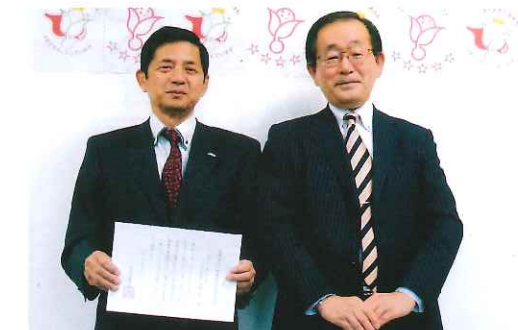
福利厚生では27年、次世代育成支援対策推進法に基づき策定した行動計画の達成が認められ、子育てサポート企業に厚生労働大臣から認定(くるみん認定)された。男性社員3人以上が子どもの看護休暇を取得したことなどが評価されたもので、女性従業員は1年間の育児休暇を取得している。

毎週水曜日はノー残業デーに定めており、完全週休2日制は業界の慣行として実施が難しいため隔週2日で実施し、担当した工事が終了した段階で1週間のリフレッシュ休暇を設けている。

若い力の活用は、年功序列にとらわれない昇進や役員への登用を行うなどして推進。30代半ばで執行役員に就く従業員もいる。また、上意下達ではなく、従業員一人一人の自主性に力点を置く事でプロ意識の向上を目指している。

加藤は「企業人として大成するには、将来を担う30、40

設立30年以上になる野球部は、出雲市建設業協会野球大会、雲南市社会人野球大会での優勝経験もあり、現在でもほぼ全員の男性社員が所属し、地域の大会に参加して親睦を深めている。また、隔年実施の社員旅行では、従業員会が中心となり、社員の希望を考慮しながら家族が参加できるプランも計画し、実施している。その他、全員参加の社内レクリエーション行事として、ボウリング大会、ソフトボール大会なども開いている。



くるみん認定式で証書を手にする社長の加藤幹夫(左)と島根労働局長の吉田宏昌



活躍する野球部

では、島根難病研究所に「がん対策募金」を贈るなど、地域社会への貢献活動も行っている。

協力業者との結束強める

取引先で組織する協力業者会「輝水会」とグループ企業で、合同の研修会や講習会を実施。今後ますます連携強化が大切になるだけに、ビデオを使った法令改正の周知、技術の研鑽などの親睦を図りながら、結束力を強めている。

公共工事の減少、少子高齢化など先の読めない時代だけに、民需へのアプローチが不可欠という大前提の下、既存事業の深掘り、そして新規事

す」をモットーに、「お客様優先の精神に徹する」「自己啓発を進め、各々の資質を活かす」などを経営理念に掲げ、「変化に順応し、新しい価値を創造しよう」の経営方針の下、全社員が社業に励む。

新入社員教育に技能大会

その基本となる社員教育は、専門的な知識と技術が必要な業務が多く、各種資格の取得に向けた研修会や技能講

習などを行っている。他にも外部研修による社員教育を行い、一人一人が企業人として職種を問わず活躍できるように会社として支援している。

新入社員やU・イーターン者には社長の加藤幹夫が10年前からユニークな制度を導入。新入社員教育として3カ月間の研修期間を終えた後、技能大会を実施し、90点以上の優良技能者を表彰するとともに賞金を贈っている。

若手従業員には技能五輪全

【会社概要】

▽所在地 出雲市高岡町16611
▽営業種目 管・水道・消防施設工事、空調給排水等の保守点検
▽代表者 加藤 幹夫
▽従業員数 約70人
▽電話番号 0853(21)0009

(敬称略)
—おわり—
(神原正之)